
ゲンゾウにナレマシタ

たくろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲンゾウにナレマシタ

【Zコード】

Z0799A

【作者名】

たぐるわ

【あらすじ】

天使な小生意気の続編的設定。恵は小悪魔に願い事を…だが、小悪魔はその願いをとんでもない形でかなえた。な、なんと源造と恵が入れ替わってしまったのです。

1・恵の願い（前書き）

先に『天使な小生意気』（1～20巻）までを全て読むことをお薦めします。

1・恵の願い

「ははっ、小悪魔に格好よく『望みが叶つた』なんて言つちまつたけど……。」

テラスの手すりにもたれかかりながら、恵は溜息混じりに呟いた。

溜め息をつくその様子が妙に色っぽく可愛かつた。

「・・・叶うわけねえだろっ！！」

拳を握り締め恵が叫んだ。

「大体、俺は最初から女だつたって？！はは、冗談だろ・・・。」
女だつた頃の記憶なんてたつた9歳までのほんの僅かな物で、もともと男勝りだつた恵の女の子らしい記憶なんて残つてはいない。さらに酷い事に、小悪魔が作り出した想像の記憶、つまり男の子の記憶が今も尚、恵の幼き頃の記憶として残つてしまつている。

そりや自分がもともと女だつたつて事は心の奥底で理解しているつもりだ。

美木と初めて会つた時の事も、源造に助けられた事も…覚えていれる。記憶として…。

”それが事実だ。” そう受け止めようと恵は記憶が戻つてから、2日間努力した。

だけど、駄目だつた。

どうしても自分が女だつて思えない。6年もの長い間、ずっと自分は男の子だつたと思つてきたのだ。さらに、6年前の恵もまた、男になりたかったのだ。

自分が女だと理解し、女になるのはもはや不可能な事なのかもしない。

「はあ・・・」

恵の記憶が戻つてから、何度目の溜息だろつか？。

皆の前では、平静を裝つて、

”女になりきることを努力している”

よう見せてはいるが、恵の本心は違つた。恵が考えているのは

一つだけ・・・。

「（どうやつたら男になれるのかな・・・）」「そう考えてしまつてから、・・・美木や源造が聞いたら何ていうかな・・・なんて考えてみる。

”めぐちゃんのバカあ！バカ、ドバカア！”と美木にはバカを連発されるかもしない。

怖いのは蘇我源造である。源造は恵の為なら、女装までしてしまう男なのである。

「俺が男になるなんて言つたら、あいつは何するかわからんからな・・・ああ、考へると寒気がしてきた」

と、恵が女の子らしいという言葉からは程遠い口調で呟く。

「（『男になる』か・・・。前は『男に戻る』だつたのにな・・・。よく考へたら、俺、前より無謀なこと考へてるんじやねえか・・・。）」

確かにそうだ。前は魔本で女にされたと思い込んでいた。

だから、そんな凄い魔力をもつた本なら男に戻る事も可能だと思つていた。

だが事実は違つた。魔本で女にされたのではなく、自分が男であると思い込まされただけだった。即ち、あの本が恵にした事は結局、ただの記憶操作なのである。

ではあの本に出来なかつた性別を変える、恵を男にするという事が出来る物はこの世に存在するのだろうか？

「はあ・・・このままずっと女のままなんかな・・・俺には源造みたいなパワーは一生、手に入らないのかな・・・」

絶望だった。

「（もう一度、小悪魔に会いたいな。）」「

ふと恵は思った。

だが、それは無理だろ？ 魔本は源造が管理している。

源造がいつも、魔本が行方不明にならないか確認しているとまで言つている。

アイツはこういふことに關してはまめな奴だ。恐らく嘘ではないだろう。

”女の子になります”と言つてしまつた恵が源造からその本を借りるなど出来るわけが無い。かといって無断で忍び込むのもどうかと思う。ばれた時が何しろ、怖い。

「ああ、もうどうすりゃいいんだよ」

その時だつた。突然、恵の頭の中で、

『フツ、満足しない様だな』

と声が聞こえた。

不気味な、そして独特なこの声、忘れるものか。

アイツだ。

あの小悪魔だ。

小悪魔は笑つてゐるかのようだつた。

「お、お前はつ！？」

恵が叫んだ。振り返つてみると、小悪魔がいない。いや、そもそもどつちの方角から声が聞こえたのかもわからない。いたる所から、小悪魔の声が聞こえ、反響してゐた。

『叫ばなくても聞こえる。私はお前の心に直接、話しかけているんだからな』

どうやら恵の幻覚ではなく、本当に小悪魔らしい。恵は二三回呼吸をしてから、

「でつ、小悪魔が何の用だ」

『用？…用があるのは恵の方じやないのか？男になりたいつて願つたろ……』

「フン、俺はお前のせいで大分、迷惑したんだヨ。」

『迷惑？』

「勝手に人の頭の中に入つてくんな、こんな力があるんなら俺を男にしろ！」

恵は叫んでしまつていた。小悪魔がクツクツクツと不気味に笑う。『おかしなことを言つ。お前はあの時確かに『望みが叶つた』と言つた。

迷惑だと言われるのなら」恵が迷惑だ。』

「取り消す、あん時の言葉は取り消すから男にしろ。」

そこまで言つて恵は一回、深呼吸する。

「”もつともお前にそんな力、ねえだろうけど……”嫌みつたらしく恵が言つた。心の中で、”勝つた”と恵は思つた。こう言われたら小悪魔は何も言い返せないだろう。何しろ、事実、小悪魔に”そんな力”は無いのだから……。

次の瞬間のことである。

ドンガラガツシャーンと何かがテーブルから落ちた。

恵はテーブルの方に目を向ける。

「つー？」

恵は驚かざるをえなかつた。

何しろ、あの魔本が目の前のテーブルの上に置かれているのである。

確かにさつきまでテーブルの上にこんなものは置いてなかつた。そして、魔本が自分の目の前で勝手にぱらぱらとめぐれ、例の小悪魔のページが開いた。

本からあいつが、小悪魔が現れた。

本の上にいつもと同じように、恵を見つめて立つていた。

「……」

恵は啞然としていた。

「お、お前、どうやつてここにー？」

『いづは源造が保管していた筈だ。』

「私に力がない。とでも思ったのか？」

小悪魔は余裕たつぱりだった。

こんな移動ぐらい造作もない。といつているかのような顔をしていた。

とはいって、こいつは前にも一度、川から自力で這い上がったのだ。別にここに現れてもおかしな事ではないのかもしれない。

「ふつ、源造といい、お前といい、全く数百年存在してきたがお前らのような奴らは初めてだ。いいだろう。そこまで願うのならば本当にお前を男にしてやるつ。… いいお似合いコンビだろ？」

小悪魔がフツと笑つた。

「えつ！？」

恵が小悪魔に問い合わせ返す暇も無かつた。

次の瞬間、不気味な小悪魔の呪文が響き渡つた。

「
　×　　÷ + &%\$# @? !
#@? !　　　@÷% + # * × \$ ÷ \$
% + # * × \$ ÷
」

そうだ。

これだ。

この不気味な呪文。間違いない本物の呪文だ。

「くつ」

恵は歯をかみ締める。

声をあげる暇なく、小悪魔に魔法をかけられていった。そう、このなんともいえない、氣味の悪さ。目がぐらむような不気味な閃光。間違いなく呪文をかけられている。

「待てつ」

と声を出しそうだが、小悪魔は呪文を止めようとはしなかつた。

「\$#@? !

@÷% + # * × \$ ÷ \$.# @? !

@≡%+#+\$*×\$÷\$+\$+#+\$*#\$×#@\$?!
% @≡%+#+\$*×@\$≡+.-@!?.」

小悪魔が黙つた。呪文が終わつたのだ。
あたりは再び、静けさを取り戻していた。
恵はすかさず自分の身体を確認する。
あれつ？恵は違和感を感じた。
何も変わつていない。

女のままだ。

髪の毛も長い。胸だつてある。何も変わつていなかつた。
「…やい、小悪魔！どこが男だつ！この大嘘つき！」
「フツ、前から言つてるだろ私はめつたに嘘は言わんと」「
「どこがだつ…どう見たつて女のまじやんか。約束だぞお。男に
しろ兀！」

「心配ない。」

小悪魔はそう言つと、本の中に消え始める。

「ま、待てっ！」

恵が叫び、本の中へ入つていく小悪魔を捕まえようと駆け寄る。
「フツ、その時がくればわかる。」

小悪魔を掴もうにも奴には実体が無い。恵の手は小悪魔の身体を
透けてしまつた。

そういうしている間にもう小悪魔は腰まで本の中に隠れてしまつ
ている。

「長く待たなくていい。今日だ。今日中にお前は男になる。もつとも源造の犠牲のもとにだがな。恵ちゃんのせいだよ。恵ちゃんが男の子になりたいなんていうから、源造が犠牲になるんだ」と、嫌みつたらしく小悪魔が言つた。

「なにい？！」

恵が声をあげた。

「なあに奴の命をとるわけじゃないから心配しなくていい。」

そう言つて小悪魔は消えてしまった。

「こら待てっ！わかるように説明しろっ！」

恵は魔本を手に持ち、小悪魔が出てくるよう、魔本を右手で叩く。
『もつとも男の中の男になれるかは知らんがな……。』

小悪魔の馬鹿にしたような言葉を最後に、恵の手の中にあつた魔本も消えてしまった。魔本が消えてから、恵は力が抜けたように椅子に座り込んだ。

「男になる……？」

そんな事があつたらどれだけいいだろうか？パーティーを開かなければならぬ。皆に仏蘭西料理のフルコースをおごつてもいい。皆に、財産の半分をわけあたえてもいい。源造と結婚しても……（…男になるのだからそれは流石に不味い）。だが、今、自分は男になつていない。男になる気配すらない。大体、前が前である。6年もの間、嘘の記憶を与えた奴である。あてになどなるものか…。

「（でも、口からでまかせなのか？アイツそんな事言つヤツだつた力？信じれんが信じたい。だけど、俺のせいだ源造が犠牲つて…）」

恵は混乱していた。あの呪文は偽物とは思えない。

だが、小悪魔にそんな力があるともやはり思えない。

性別を変えるというのは恐らく相当な魔力が必要だらう。

恵が考えにふけていると、

T L L L L L T L L L

と、床に落ちていたコードレスの電話が鳴り響いた。

先ほど小悪魔の魔本が現れた時、床に落ちたのだろう。

「（壊れていなくてなによりだ）」と、恵は考えつつ、受話器を取る。壊れいたら何故壊れたか、説明せねばならないからである。

『惠様』

頬子さんだつた。

『皆様が来ていますが…』

言われてからハツとした。

そうだ。今日は源造や美木達と映画に行く約束をしていたのだ。
恵は慌てて、玄関へ向かつた。

玄関の外には源造、藤木、安田、美木、小林の五人が待たされて
いた。

恵はまだ出てこない。大急ぎでこちらに向かっているのだろう。

「おい、そう言えば呪いは大丈夫なのか？」

小林が心配そうに源造に聞いた。

「だからいつてるじやんか、呪いなんてかかっちゃいねえつてよお

「…無理せんでいい…」

「だが、運は良くなつてるぜ」

呪いはすっかり消えた。といつ意味だった。

源造は言葉を続ける。

「今朝まではちゃんとあそこにいたけどよお、

小悪魔の奴、今頃、押入れで成仏しちまつてるんじやねえか？」

成仏どころか、天使邸にまで来てしまったのだが、源造は知るよ
しもない。

「油断はするなよ」

小林が釘を刺す

「・・・あたりめえじゃねえか・・・」

源造が言った。

「ごめえん、待つたあー！」

恵が走ってきた。

「めぐうーー！大丈夫、全然全然待つてないよー！」

源造が元気一杯に答える。恵に抱きつこうとしているではないか。
あまりの迫力に恵がひき、

「馴れ馴れしく言つたなー」と、叫ぶ。

「めぐちゃん、女の子はそんな乱暴な言葉使わないわよ。せめて『馴れ馴れしく言わないで』でしょ？」

美木が訂正する。そうだった。

恵は『女の子になります宣言』をしてしまったのだ。（「どんな宣言だよ！？」）

恵は反論したくなるが、前の前では、特に美木の前では仕方がない。

「あつ！馴れ馴れしく言わないで」と言い直す。

その言葉が妙に可愛かった。源造が顔を赤くさせ、「めぐちゃんって優しいね。最近、ますます女らしくなったよ」と、優しい口調で言う。

「（くそお、こんな事やつてちゃ馬鹿がつけあがるだけじゃねえか！美木の奴、人の気もしらないでつー。）」

これが恵の内心である。

まさしく口だけ、女になる努力など微塵もない。そんな恵を見透かしてゐるのか、美木がハアと誰にも聞こえない程、小さな溜め息をついた。

「さて、皆そろつた事だし。行きましょうか」

美木が提案した。

「そうですね」と、藤木が安田が小林が賛成する。

と、いうわけで、一同は映画館へと徒歩で向かつた。

映画館はそれ程、遠い距離ではない。いやむしろ近いぐらいだ。それ程広い映画館ではないが、100～400人程度を収容できる劇場が7館ほどある。

7階建ての小さなビルの4階から7階が映画館だ。4階にロビーや売店があり、劇場は4階に1館、5階・6階・7階にそれぞれ2館ずつある。

「暗闇だからつて変なことしないでね」

4階のロービーで待っている時に、美木が念を押す。

恐らくその言葉は小林に向けられているのだ。

だが、小林は自分に対する言葉だと思つていなかつた。

「そんな奴は俺がやつづけてやりますよ」

と、格好よく言つと、チケットを買いに行つてしまつた。

「そうだぞ、変な事したら殺すからな」

恵も源造に対し、言つた。

「めぐちゃん！」

美木が恵に注意した。

“女の子らしくない”といつてゐるのだ。顔は笑つてゐるのだが、目が笑つていらない。

「（こ）怖い。怖いぞ…美木」

美木の笑顔であり、笑つていらないその目に恐怖を感じつつ、恵はしぶしぶ

「源造君、変な事しないでね」と言いなおす。

源造君と名前で呼んだのが不味かつたのだ。源造は大喜びだつた。

「大丈夫、そんなこと全然しない！」

源造は喜びを全身で表現してゐた。

その不気味さに恵がそして皆が一步、いや数歩、そそくさと彼から離れる。

「げ、源造君、それは止めてくれない（き、氣色悪い）」

美木がいるので、乱暴な言葉は使えない。

「はいはい、止めます！止めます！」

と、源造は言つた。とは言つものの、何も改善されていない。

そればかりか、

「僕達、恋人みたいだね」

と、言つ始末である。これには、藤木が源造を睨みつけた。もつともその程度の嫉妬を気にする蘇我源造ではない。

ちなみに安田は可愛い恵がカメラに収まるごとに、嫉妬どころか喜び

である。

「な、何いつてんだよ・・・言つてるのよ」

美木に睨みつけられ、恵は途中で慌てて言い直す。

「めぐうー！－可愛いよお！」

源造が恵に抱きつかん勢いである。

恵も反撃できず、ただ逃げるだけ…。

こういった日常に恵はこりごりだった。

「（以前だったら、源造叩いても何にも言わなかつたくせに・・・）

恵は美木を睨もうとしたが、逆に睨み返され、沈黙。

「その調子、その調子。一人ともお似合いよ」と美木は満足げである。

どうやら恵を女子らしくしたいと共にあらうことか蘇我源造とくつつけようと考えているようだ。

恵もそれに気づき、今度はしっかりと睨み返す。

少しは悪気を感じているのか、今度は美木も睨まず、完全な笑顔を見させてくれた。

恵はとりあえず、一息つく。

「皆さん、お待たせしました」

列に並んで映画の前売りチケットを座席指定券に引き換えていた

小林が戻ってきた。

チケットは、先日の岳山での事件で助けてくれたお礼にと、美木のおじりである。

小林だけは武士たるもの、”自分で払わなければ”とか何とかいい、自分のお金で買つたらしいが…。

「座席は一列に確保しました。F列の15番から20番まであります」

小林がチケット片手に説明する。

「俺、めぐの隣がいい！」

源造が真っ先に手を上げた。

「俺、じゃなかつた、私は嫌！」

恵が異議を申し立てる。

「私はどこでもいいけど……」

美木が言った。

「別にどこでも……」

残念そうに安田が言った。安田はどこでもいいらしい。
劇場内ではカメラが撮れないから、別に恵の隣でなくともいいと
いうわけだ。

「……俺は恵さんの近くが……」

藤木が勇気をだして言った。

もつとも勇氣は出したが、誰も聞いていなかつたようであるが……。
「ねえねえ、どうする？ ジャンケンで決める？」

と、美木の声が藤木の言葉をかき消していた。

「そうですね。ここには公平に勝つた人から順に右側つてことだ……。
私はそれでいいぞ」

と、恵も賛成する。

「上等だ。俺もいいぜ。」

源造も納得したようだ。

「じゃあ、俺も……」

安田も同意する。

「……俺もいいぞ」

藤木も結局、同意した。

「せえーのつ！ ジャンケン ポン！」

恵のかけ声で皆がいっせいに手を出した。

恵はパー、小林はグー、美木はグー、源造はパー、安田はパー、
藤木はチョキと勝負は決まらなかつた。

次は恵がグー、小林がチョキ、美木がパー、源造はグー、安田は
チョキ、藤木はパーと勝負は決まらない。

三度目も、恵はチョキ、小林はグー、美木はチョキ、源造はチョ

キ、安田はパー、藤木はチヨキとましても勝負がつかない。

「なあ、人数多すぎねえか」

「源造、まともなこというじや やねえか」

と、恵が言った。源造の言う事はもつともだ。

このままでは勝敗は決まらないだろう。

「じゃあ、とりあえず、皆グーとパーを出して、二グループにわけましょ。それで勝った人同士が、戦うの……」

美木が提案する。皆がいっせいに出した。

今度はうまく言つたようだ。恵・小林・藤木がパー。安田・源造・美木がグーだった。

次に、恵・小林・藤木グループでは、恵がチヨキで他の二人に、小林がパーで藤木に勝つた。

安田・源造・美木グループでは、美木がパーで一番初めに、次に源造がチヨキで勝つた。

最終的に決まったのはこうだった。

左から藤木・安田・小林・源造・美木・恵だった。

この結果に、源造が、小林が、藤木が泣いたのだが、ほっておこう。

「めぐちゃん。ポップコーンいる？」
席についてすぐに美木が恵に聞いた。
流石、花華院家の美木が用意した席だけあって、広い。
飛行機や新幹線のようにものを置けるテーブルもあった。
値段も普通より1000円ほど高いらしい。前が通路で足が伸ばせた。

「うん？いや、止めとく（太るから）」

その考えは妙に女の子らしい。

「じゃあ、飲み物は？買つてくるけど……」

「そおだな。コーラお願ひ」

と言つて、お金を美木に渡す。

「恵は「一ラ、と。源造君は？」

「俺？俺も「一ラかな」

と、源造も中身の少ない財布からお金を出す。

そして、そのお金を美木に手渡した。

美木はお金を受け取ると、立ち上がり、小林の前に行く。

「小林君は？」

「えつ、俺は…アイスコーヒーで…。あつ、皆の分、大変ですね。

お供します」

小林が立ち上がった。確かにこれだけの量を一人で持つのは不可能に近い。

いや、正直、二人でも大変だが・・・。

「安田君と藤木くんは？」

「俺、オレンジお願いします」と、安田。

「俺はアイスコーヒーで…あつ、俺も行きます」

藤木と美木と小林が売店に向かうのを恵と源造と安田が見送った。安田は館内撮影禁止でがっかりしているようだった。安田はトイレに行くといつて席を離れた。まだ、あたりは明るい。上映開始まで10分近くあるのだ。

近くに誰もいないことを確認してから、

「なあ、源造？」

恵が真剣な顔で言つた。

「なあに、めぐ・・・？」

最初はハイテンションで応対する源造だったが、恵のただならぬ

雰囲気に黙り込む。

「あれからお前の呪いどうなったんだ？」

「えつ、い、いやだなあ、俺、呪いなんて全然ないよ。平氣平氣！」

それならめぐちゃんこそ大丈夫なの？」

「嘘は言わんでいい。あの日を境にピタリと呪いが消えたんだ。見てりやすく述べ前に呪いが移つたってわかるよ。小悪魔も言つてた

しな。お地蔵さんなんかで俺をだませるとでも思つたのか？」

少しの沈黙があつた。恵の目が源造を窺つ。

「・・・消えた。大和撫子杯の前に俺は小悪魔にお願いしたんだ。もつ、呪つなつて・・・。それから消えてる。恵の記憶が戻つてからも小悪魔、呼ぼうとしたんだけど全然、出てこねえんだ」

源造は観念したのか、恵に言つた。

恵は源造に今朝の事を話すかどうか悩んでいた。

話すつもりだった。だけど、いざとなつたら話せない。

だが、あの小悪魔は”源造の犠牲のもと”にと言つた。

命はとらないといつたが、少なからず、恵が源造に迷惑をかけると言つ事だ。

やつぱりいわなくちや・・・。

「なあ、今日、小悪魔が...現れたんだ」

「！？」

源造は驚いているようだつた。それもその筈だ。

「魔本が、ヒヨイと現れてや、あれには参つたよ」

恵が言つ。

「そしたらア、源造が何かの犠牲になるつて言い出したんだ。命はとらないつて言つたけど...」

やつぱり言えない。恵は感じていた。

頭では言おう言おうと思うのだが、口が動いてくれない。

「...めぐちゃんのためなら俺は全然、構わないよ。それに命はとらないんだろ。大丈夫だよ」

いつもの笑顔で源造が言つてくれた。だが、その言葉は余計に恵を苦しめる。

こんな優しい源造に自分は、迷惑をかけようとしている。

今回の事件は明らかに恵自身が引き起こしたものだ。望まなければ小悪魔は出てこなかつただろう。そう、男になりたいなどと望まなければ・・・。男になれるかどうかは別として、小悪魔は、こういうことは実行に移す奴だ。もしかしたらまた、源造に呪いをかけると

言つてるのかもしれない。

「…だけど、これだけは聞きたい。何で小悪魔が現れたんだ？」

真剣な目だつた。恵は目を逸らす。

「俺に言えないことなんのか？」

源造が言つた。

今だ。今なら言える。恵はそう思つた。

「実はな…」

恵が言おうと身体を乗り出した、その時だつた。

「お待たせしました」

小林の声だつた。

恵がはつと振り返ると、そこに小林が、美木が・安田がそして藤木が立つていた。

安田以外は皆、両手にコップを持っていた。美木が源造と恵の間に入ってきた為、恵は源造から離れる。言う機会を逃してしまつた。

「はい。これめぐちゃんの」

恵と源造の間を遮るように美木が座つた。

美木は隣に座つている恵にコップを手渡した。

「それでこっちが源造君の」

「あつ、どうも」

礼を言つて源造は美木からコップを受け取る。

ビーラーと、上映開始のブザーが鳴り、あたりが暗くなかった。
最初はCMである。やはり休日の為か、どこも席は一杯だつた。

映画のストーリーはこうだつた。

アメリカの若い男性、トムが主役の物語だつた。

トムはとある大学の研究員だつた。トムには恋人がいた。その恋人はリサという名で、トムと同じ大学の研究員だ。そして、ある日、トムとリサが一人である実験をした。

だが、途中でリサが、決して混ぜてはいけないといつ薬を誤つて混ぜてしまった。

大爆発が起こる。そして、あろ「」とか一人の身体が入れ替わってしまったのだ。

パニックを起こしたトムをリサが落ち着かせる。『うこうとき、女性の方が強いのかもしない。』と源造が思った。

いやまた、トムはリサの筈だから、今落ち着かせたのは、リサではなくトムなのか？もうわからなくなってしまった。

リサになってしまったトム、トムになってしまったリサはこれからどうするか相談する。

一人が出した結論は、皆には正体を隠しながら生活すると云つも のだつた。

『あなたがアタシなんて恥ずかしくて言えない…』

でかい男がその台詞を云つのだから面白い。

『僕もだよ。女になっちゃったなんて皆にばれたら…』
という事だつた。かくして一人の偽りの生活が始まった。
それから先のことを源造は覚えていない。

どうやら寝てしまつたらしい。

気づいたら映画が終わつてしまつていた。

「源造君、映画終わったわよ」

隣に座つている美木が源造に云つた。

「もう？」

源造は思わず聞き返す。

「全く、お前は映画を最後まで静かに見ようといつ氣にはならんのか？」

小林が注意する。

「寝るだけならまだしもだがな、五月蠅かつたぞ」

恵が言った。

「めぐちゃん」と、美木が恵を叱る。どうせまた、今の台詞は女らしくない、

と言つてゐるのだね。」「はははいー」と、恵が条件反射で謝る。

「くつ？」

源造が話の意味を理解できないでいると…

「いびきがちよつとね」

と、鼾をかいていたことを美木が教えてくれた。

恐らく、五月蠅かつたのだろう。源造は反論できなかつた。

「とにかく出ましょうか？」

恐縮している源造を見かねた小林が提案した。

「そうだね」

恵が同意した。上映が終り、劇場は再び、明るくなつていた。

「源造、行くぞ」

恵が源造に言つ。

恵の言葉で今まで、気まずそうにしていた源造の顔はパッと晴れ、幼稚園児も吃驚の子供っぽい笑顔で源造は恵の横に並んだ。

「全く」

といいつつ、恵が然程嫌がつていないのは源造に好意を抱いているからなのか？

美木はそんな二人の後を付けながら疑問に思つていた。

恵と源造を先頭に、小林と美木、そして安田と藤木が二列でゆつくりと劇場を後にした。

後ろの美木は小林と何かを話しているらしく、聞いていない。

恵はそれを確認すると、正面を向いたまま、

「源造…」

恵が後ろを歩いている美木に聞こえないほど小さな声で言つ。

「なあにめぐちゃん！？」と大きな声で言おうとしたが、止めた。上映開始前といい、今といい恵の様子がおかしい。

恵は小悪魔について何か言おうとしていた。もしかしたらもう一回、言おうとしているのかも知れない。

源造は恵の顔を伺つた。

「ジロジロ見んな。美木が怪しむ

言われて慌てて源造は正面を向きなおす。

「小悪魔のことか？」

源造が正面を向いたまま、小声で聞いた。

「そうだ」

恵がかすかな声で肯定した。

「アイツが、どうしたんだ？俺の犠牲ぐらいだつたら構わないよ」

「…今は不味い。美木に聞かれた不味いんだ。

家に帰つたら10分後に公園にいくから。お前も来い」「でツデー！？」

源造が大喜びで言う。小声だったのが幸いだ。

「バカヤロウ！小悪魔の話だ」

真剣な話をしているんだぞ、と恵が源造を睨む。

「ごめん」

「お前に関わるんだ。俺とお前に…」

恵が真剣な表情で言った。

「（俺に…？）」

源造は疑問に思つたが、何も言わなかつた。

「めぐちゃん」と源造君、意外と仲いいのね

「うわっ！」

突然の美木の声に驚いた恵が声をあげた。

「なななな、何だよ美木、急に驚くじゃねえか！」

いつもの恵の口調になつてゐるが、美木は何も言わなかつた。

それよりも美木は源造と恵の仲に興味があつたのだ。
真剣な話をしていたなどと、微塵も思つていない。

「デートの約束でもしてたの？！」

「ば、ば、ば、バカ！誰がこいつなんかと！」

「真つ赤な顔で言われても説得力ないわよ」

美木が楽しそうに言う。

後ろで藤木が複雑な目で見ていた。

「（俺のようなフツウは、台詞も少ないんだ。シクシク）」

「フツ、まさかあんな映画を見るとは」

小悪魔が呟いた。小悪魔の前には小さな池がある。
池といつていいのかわからない小さな小さな水溜りのよつたもの
だ。

そこに一本の釣竿がある。竿は池のなかの何かを釣るものなの
か?

池の中には家に向かつて歩く恵達が映っていた。

「これは丁度良い」

小悪魔は不気味に笑っていた。

『それじゃあ、また明日』

池の中の恵は皆と別れた。源造が、小林が安田が、藤木が、美木
がそれぞれ別の方角へと分かれていいく。池の映像はふたつに分かれ、
右には恵が、左には源造が映っている。

恵は家の近くまで行くが、家には戻らなかつた。玄関の前を素通
りする。

約束どおり、公園に向かうらしい。

「フツ」

それを見て小悪魔が不気味に笑う。

その時、小悪魔はふと、あることに気づいた。池に美木が映つて
いたのだ。

美木が後ろを付けている。

「チツ」

小悪魔は舌打ちすると、立ち上がった。

そして手を伸ばし、何かを唱える。

『恵を追うな。』

どうやらひたすら、そう唱えているようだ。

池に映っている美木の目から光が消えた。美木はその場にしゃがみこむ。

『何…？誰なの？』

美木の声が小悪魔の耳に届く。今、美木の頭に直接呼びかけているのだ。そう、”美木が恵は女の子だ”と気づいてしまい、再び魔法をかけたあの日と同じように…。

「美木ちゃん君はとんでもない事をしている。人の恋路を邪魔してはいけない」

美木の頭の中に小悪魔の声が聞こえる。

だが、美木にはその声が誰なのか理解できない。

それどころか、自分は誰なのかも考える事もままならない。

『あなた、誰？』

「私は人を幸せにする者だ」

『恵を追つちや駄目？』

「そうだ」

『絶対に？』

「そうだ。君は追うと後悔する」

そんなやり取りが何度も続いたのだろうか？

美木はふらつきながら来た道を戻っていった。

どうやら小悪魔の暗示にかかったのだらつ。

「フウ、美木も無駄な力を使わせてくれる。美木がいると魔法が上

手く効かんからな…」

小悪魔は再びしゃがみ、釣竿を手に持つ。

「さてと、そろそろ朝にかけた魔法が効果を現すころ、かな？」
池の中には公園が映っていた。

源造は家に少し寄つてからすぐに、公園に来た。

惠と「デート」、花ぐらい買つてきた方が良かつたかな？

源造はそう思いながら、時計を確認する。

恵は10分後といった。まだ5分しかたっていない。

考えてみりや、前は時間通りにいけなかつたんだな。
あの時は藤木を助けるのに手間取つた。約束の時間に30分も遅

れてしまった。

がつ、あそこで藤木を見捨てなかつたのは正解だと今でも思つて
いる。

だが、少々、時間をかけすぎてしまった。

今日はそんなへましねえ。源造が、そう思つた時、恵が見えた。

「源造、待つたか？」

源造の前まで来ると、恵が聞いた。

「い、いやあ、全然。全然待つてない」

「そつ、それ？」

恵が源造の右手にある魔本を見て訊いた。

「ああ、一応持つてきた」

魔本を恵に見せ、言う。

「やうだな。悪いが、ここじゃ、話せん。人の少ないところへ行くぞ。
言つとくが、告白じやないからな」

「わかつてゐよ」

源造は告白じやないと詫き、ちよつとがっかりした様子で言つた。
源造とてそこまで馬鹿じやない。事の重大さぐらいは理解しているつもりだ。

だから、魔本も持つてきた。魔本は押入れの中にちゃんと元通りしまつてあつた。

恵が嘘をついていとは絶対に思えないから、この魔本は天使邸で消えた後、また

元の場所に戻つてきたのだろう。恵が連れてきたのは、源造の家の近くの川原だつた。

全ての始まりの川原である。「こゝで恵が魔本にお願いしなければ、全く違う人生を歩んでいただろう。あたりに誰もいないのを確認して、恵が

「実はな、源造。」

源造は黙つて聞いていた。

「俺、小悪魔にお願いしちまつたんだ」

「！？まさか、寿命取られたんじや？」

「おいおい、心配する前に何願つたのか聞けよ。

大丈夫、寿命は取られてない。それより…。すまん、源造！」

恵が源造に頭を思いつきり下げる。

「えつ、ちょ、ちょっとめぐちゃん？」

源造は慌てふためく、いきなり頭を下げられてどうしたらいいかわからないのだ。

「俺が全て悪いのだ」

恵が源造に頭を下げたまま言つ。

「と、とにかく頭を上げてよ。めぐちゃんは悪くないから」

「いや、俺が悪い。だって俺は、魔本に…。また男にしてくれと頼んじまつたんだ」

「…………」

暫くの沈黙。

「…………」

源造はなんて答えたらいいかわからなかつた。

恵はただただ、頭を下げるだけ……。

「フツ、そんなことだらうと思つたぜ」

源造が落ち着いた表情で言つた。

「何でだよ！ 何で、そんな落ち着いてられるんだ。

俺は源造を犠牲にして、男になるうとしてるんだぞ……動機が不純なんだぞ！」

恵がヒステリックに叫ぶ。

「……今に始まつた事じゃないだろ。俺は恵の為なら命を捨てる覚悟だ！ 俺はお前にどこまでもついていく！」

源造が言い切つた。恵が頭をゆづくつとあげ、源造の顔を向つ。彼はいつもの笑顔だつた。

「フツ、蘇我源造。貴様も面白い事を言つて

「げ、源造……」

「それでこそ、いつものめぐだ。頭を下げるなんてめぐらしくねえぞお。」

「そうかもな……」

恵が小さい声で言つた。

「しかし、あの小悪魔に恵を男にする力があるとは思えんのだが……」

「何だと……私はそのように見られていたのか？」

「源造、もつともなこというじやねえか。実は俺もそつ思つのだ」

「恵まで何を言つている……」

「つてことは？ 口からでまかせ

「断じて嘘ではない」

「だけど、あの小悪魔、すっげー自信ありそつだつたんだよ。まあ、俺も半信半疑だが……」

恵がぼそりと呟いた。

「でっ、小悪魔はいつ恵を男にするつて言つたんだ?」「

「もうすぐだ。そろそろだな」と、魔本の中の小悪魔が思つた。

「今日中つて言つてた」

恵が源造に説明した。

「美木ちゃん、知つてるのか?」「

心配げに源造が尋ねる。

「いや、言つてない。途中まで美木が俺を付けてたみたいだけど、途中でいなくなつた」

「時間だな。10、9、8、

恵と源造の様子を本の中で窺つていた小悪魔がカウントダウンを始めた。

「いなくなつた? 变じやねえか? あの美木ちゃんだぜ」

「6、5、4、

「そおだよな。いつもなら美木の奴、俺に撒かれるなんてへましねえんだけど……。」

「2、1、時間だな」

小悪魔がそう、思つた次の瞬間、

とてつもない閃光が、恵と源造を包み込んだ。

そう、小悪魔が呪文をかける時と同じ、閃光だ。

「源造! ? こ、これ! 」

「あいつだ。小悪魔のヤロウだ! 」

「わあああああ(時間だ。時間がきたんだ。)」

あまりの閃光に源造も恵も条件反射で目をつぶつてしまつ。急に身体の力が抜けていく。恵も源造も膝をついた。

「くそつ」

源造のその言葉を最後に、二人は意識をなくした。

それからジのぐらじ立つただろうか。

「・・・・」

恵は川原に倒れていた。

「どうなったのだ?」「

起き上がるうとして、恵は違和感を感じた。いつも自分の自分じゃない。声が違う。これは女の声じゃない。男の声だ。だけど、どこかで聞き覚えがある。

「（男になれたのか？）」

恵は無意識のうちに喉を手で触った。喉仏がある。

やつぱり、男になれたんだ！

もう一度、声を出してみる。

「あー。あー。あー」

やつぱり男の声だ。恵は慌てて胸に手を当てる。胸は膨らんでいなかつた。

右手も感覚が違う。じつじつとした大きな手だ。今までの小さいひ弱な手じゃない。

恵が起き上がって、もつと身体を確かめようと、身体を起しそうとしたその時だった。

女の声だ。女の子の声が聞こえた。慌てて恵は声がしたほうを見た。

そこには信じられない光景があった。

2・これが事実なのだ

「ううう。め、めぐ？」

源造は仰向けに倒れたまま、真っ先にめぐの安否を確かめようと、声を出した。

まだ、完全に意識が戻つてない。身体はまだ起らせてもらつた。

「つ！」

声を出してからはつとした。

いつもの俺の声じゃねえ。俺はこんな高い声じゃねえぞ。
口に手を運んで、違和感を感じた。手がいつもと違う。慌てて、
その手を源造は田の辺りまで持つてくる。視界には青空が広がつ
いた。そんな青空を白い細い腕がさえぎつた。

一瞬、源造は恵が自分の上に手を差し出したのかと思つた。

だが、違う。

仰向けに倒れている自分の視界に入った手は、まさしく自分の手
だ。

自分の思い通りに、自分の手であり自分の手でないその白く細い
腕は動いた。

グー、パー、グー、パーと動かしてみる。

間違いねえ、俺の思い通りに動いてやがる。

その時、源造は違和感を感じた。胸がある。胸が自己主張をして
いる。

ど、どうなつちまつたんだ。源造はパニック状態だった。
女のよつになつてしまつた。いや、女のよつにではない。まさ
しく女だ。

「はははは、俺どうしちゃつたんだろ？」

すでに完全に意識は戻つていたが、あまりの出来事に源造は起き
上がる力もなかつた。

その時だった。近くで男の声がした。

「ああああ」

恵は驚いていた。相変わらず、男の声だった。

自分の前に自分がいるではないか？

このロングヘアの女は間違いない。天使恵、自分自身だ。
鏡で何度も見たことある、その顔が、その身体が今、自分の目の横たわっている。

グーザーパーなどと腕を動かしているではないか！？

・・・なにやら胸を触つて驚いているではないか！？

「ど、どうなつちまつてるんだヨ？ 一体！？」

がらがら声で恵が呟いた。男になる事は少しは予想していたが、こんな事になるなんて思いもしなかつた。

天使恵の顔がこっちを向いた。天使恵の身体も驚いているみたいだつた。

「おお！…俺が一人！？」

と、男になつた恵を見て奇妙な声をあげている。

まさしく自分の、天使恵の声だ。

一体どうなつちまつたんだよお・・・。恵は混乱していた。

「（とりあえず、状況整理なのだ。）」

恵は自分自身に言い聞かせる。

「（俺は男になつたのだ。声も身体も男だ。それで俺の目の前にも俺がいる。俺の身体だけど、俺じやない。その身体は女のままなのだ。しかし、その俺の身体は変な事を口ずさんで、朦朧としているのだ。そして源造が・・・いない）」

その時、よからぬ思いが恵を襲つた。ま、まさか…。

あの映画が頭をよぎつた。今日見たばかりのあの映画が…。

もし、あの映画さえ見ていなければ、こんな発想は思いつかなかつただろう。

いや、そんな筈が…。だが、それなら納得が…。

恵は勇気を振り絞り

「源造？」と、自分自身の身体に尋ねてみた。

「……」

少しの沈黙が…。天使恵の身体が混乱しているらしい。

「……俺が声をかける。恵はどうじちまつたんだ？」

天使恵の身体が小声で返答した。相当、混乱している感じだった。さつきから手をグーゲーグーゲーと動かしては、無意識に身体を確認したりしていた。

これでわかった。自分の目の前にいる女は源造だ。女の身体に驚いて、混乱しているという事なのか？

と、言う事は、俺が源造なのか？恵はふと思つた。

「あ、ああ、あ、お、俺、蘇我、源造」

色々と発声してみる。確かにこの声、源造の声だ。

その声を聞いて、余計に混乱したのか、天使恵の身体をした源造はパニック状態だった。

無理もない。自分の身体が自分の名を呼んだりしているのである。源造を無視して、恵は発声を続ける。

「俺が男の中の男になつてやる！」

「そうだ、この声だ。源造だ。

「めぐうちゃ～ん～～！テートしよお」

我ながらナイス演技だと思う。これで、100%確定した。

この不気味な声、蘇我源造である。この身体も源造のものだろう。恵はよいつしょと、不慣れな源造の身体を動かした。

何とか普通に立つ事が出来た。

見おろすと口をパクパクと開けたり閉じたりしている女が横たわっている。

天使恵の身体である。だが、恐らくこの中の中身は源造だ。

恵は深呼吸する。

そして、天使恵の身体を見下ろしながら、

「おい、源造！起きろ！」

源造の身体をした恵が声をかける。

「……俺が一人？」

天使恵の身体（中身は源造と思われる）がボソッと呟いた。

「おい、源造！起きろ！」

「誰だ。誰かが俺を呼ぶ。いや、これは俺だ。

俺の声だ。俺が、覗き込んでいる。俺の顔が見える。

「恵だ。天使恵だよ。それでお前が源造だ。」

源造の身体が言った。

「……め、めぐちゃんなの？」

源造はほとんど無意識に問いかけた。まだ、頭が混乱していた。処理能力の少ない頭だ。しょうがない。といつたらやつぱり失礼に値するだろう。

「源造、唐突だが聞いてくれ、俺の推理はこうだ。あの小悪魔は俺を男にするといった。だけど、俺の身体を男にするんじゃなくて、源造と俺を入れ替えるって事だったんだ…。それなら力もあんまり使わなくてすむはずだ」

「…………」

天使恵の身体をした源造は何かを考えているようだった。

蘇我源造の身体をした恵も、彼、いやこの場合彼女になるのどうか？とにかく源造に考える時間を与える。

「…………」

「…………」

恵も源造もお互いの顔をじつと睨めっこしている。

普通ならどちらかが笑ってしまいそうだが、今はそんな状況ではない。

卷之三

[2]

恵はじつと天使恵の身体をした源造を伺っていた。

「・・・・・俺が恵で、恵が俺！？」

恵の身体をした源造が自分の身体をつま先から胸の辺りまで見て

「はは、俺、また、スカートはいてるよ。」

源造は無意識に言つてから思つた。

それにこの綺麗な白い足、恵のものに間違いなさそうである。

「・・・・俺が恵！？？」

天使恵の姿をした源造がわけのわからぬ声で叫んでいた。

「（源造、俺の身体で変な事すんな）」

とでもいつてやりたいが、”元凶は自分なのだ”と、自分自身に言い聞かせる。恵が望まなければこんな事にはならない筈だ。もしかしたら、今度こそ、源造に嫌われるかもしれない。と恵は思った。岳山での事件で、恵は一度、源造を見捨てている。見捨てたも同然だ。自分は美木をとつた。そのせいで源造は棍棒で殴られたのだ。

そして、自分は源造に、何も言ってあげられなかつた。

足を拘束され、壁につながれていたせいだ。なんて事は言いわけにもならない。

恵は源造に何も言つてやれなかつた。源造が爆弾を仕掛けられた時だつてそうだ。

あの時、自分はそばにいてやるべきだつたのだ。

それなのに爆発の瞬間、自分はどこに行つてた！？

安全なところで爆発を見ていただけではないか？

源造は傷ついていたのだ。自分が盾になるべきだつた。

その結果があれである。源造は爆発に耐え切れず、気絶してしまつた。

それでも源造は恵を恨まなかつた。だが、今度ばかりは状況が違う。

恵は男になれて喜べる。ずっと願つてきたのだから・・・。

だが、源造は女になつてしまつたのだ。

小悪魔に”自分は男で、女にされてしまつた”と思わされたあの数日、自分はどんな辛い思いをしたのか…。恵は今までのあの時のことをしてしつかりと覚えている。

何をしても『女の癖に』、何をしても『女の子はもつと女の子らしく』といわれたのだ。

あの屈辱は忘れられない。いや、今回は自分の時と全く違う。

源造は16歳の男だ。16年間、正真正銘の男だつた。

そして今頃になつて、源造は女にされてしまつた。天使恵という女に…。

今までの経験でわかる。天使恵のあの身体には力はない。源造のような力は絶対ない。

恐らく、源造には耐えられないだろう。自分の時は9歳だから男も女もなかつた。

女になつたと思わされても、まだそれ程激しい、違いはなかつた。そして何より、自分は女だつた。

だが、源造は…。もともと男だ。

「…『めんなさい…』」

蘇我源造の姿をした恵が申し訳なさそうに謝った。
源造には本当に申し訳ない気持ちで一杯だった。

「め、めぐちやん？」

天使恵の姿をした源造が驚いた表情で呟いた。

「源造、俺が小悪魔になこと頼んだから…。…やっぱり俺は男になんかなつちやいけなかつたんだ。」

「…」

源造は黙っていた。

お、俺はなんて恵に言葉を返せばいいんだ？

源造は苦悩していた。そんな間にも恵の言葉は続く。

「源造、憎んでいいんだぞ？俺は自分の欲望のために、お前に迷惑をかけちまた。お前に嘘ついてたんだ。『女になる』なんて言つて…。そんな気、これっぽちもなかつたのに…。こんなの、全然男らしくねえよな…。」

蘇我源造の姿をした恵の言葉だったが、

源造にとってその声は蘇我源造の男の声でなく、天使恵の女の声のように聞こえた。

「…めぐちやんを恨むなんて俺には出来ない。さつきも言つたけど俺はどこまでも恵についてくつて決めてんだ…。女が何だ！？前にも言つたら、恵が男になるんだつたら、俺が女になつてやる！」

「…源造、ありがとう。でも、お前に迷惑はかけられん。元に戻ろう…」

真剣な表情だ。恵自身、かなりつらい選択だった。

「うん。…だけど…」

源造が言つ。

「何も言つな。俺はお前の身体で男になつても嬉しくないのだ」

嘘だつた。男になれて喜んでいない筈がない。

ましてや源造のよつな強い体を今、手に入れているのだ。恵は嬉

じくてたまらなかつた。

「…俺が…男になれるで嬉しい
だけ…お前に迷惑にかけ
れんのだ。俺のプライドが許さん」

源造の言葉を無視し、恵が言葉を呴いた。

「だナビ」

「五月蠅い！」

源造が何か、ぐぢやぐぢやと嘗めたりするので恵が怒鳴つた。

「でも、めぐちゃん」

「あああー何だよ？ 一体、俺は男になれんでいいと言つておるでは

「なしか」

惠か叫んた

なの？」

• • • • • • • • • • • • • • • • • •

源造のもつともな質問に恵が固まる。

た確かにそうだと云ふ元に戻れる？

そう、小悪魔だ。だが、小悪魔が元に戻すだろうか？

「原題」の意味は、物語の題材をもつて書いたもの。

源造は源造に手を差し伸べる。源造と田があつた。

上半身を起した状態の源造は田線を少し上に、じと恵を見

てしる

妙に可愛かった。

「（うつ、”可愛い”ではないか？って、何を考えてるんだ俺は、相手は源造だぞ、相手は自分だぞ）」

”抱きしめたい”という感情を無理やり押し込む恵。

「（男ってのはこんなものなのか？！女を見ると、いつも想いつらまつものなのか！？）」

恵の頭は混乱していた。

「（いかんいかん。落ち着け。相手は俺だ。相手は源造だ）」

とにかく、無理やりこの変な想いを押し込めるには成功した。そんな恵の気持ちを知つてかしらずか、天使恵の姿をした源造が蘇我源造の姿をした恵の手を掴む。

恵はそのまま、源造を引っ張り起こした。こうすることをするには男の身体は便利だ。

「め、めぐちやん？」

こうなり手を勢いよく引っ張られたのだ。突然の事に、源造が驚く。

起き上がった源造はこれが自分の身体でないことを、再確認させられた。

何しろ、身長が違う。それに身体が軽い。天使恵のロングの髪の毛の感触がした。

「とにかく、小悪魔を…」

源造をまともに見ないよう、恵が少し田を逸らしてしまった。た。

本当は『もう一度、呼ばづ』と言つつもりだったが、止めた。呼ぶ必要がなかつたのだ。小悪魔はもう、近くに落ちていた魔本の上に立っていた。

どうやら、あの閃光のとき、源造が魔本を手から離してしまったのだろう。

そしてあそこに落ちているのだろう。

「お一人とも気に入つて頂けたようですね。私も嬉しい。」

あの時だ。恵が女にされた時（正しくは違うが…）と同じ口調の

台詞だ。

「やい、てめえ、こんな叶え方ねえだろ、元に戻せ！」

恵が怒る。

「あれえ。男になりたかったのでは？」

小悪魔が言つた。

「なりたいとは言つたが、こんな方法じゃなくてだな。俺だけ男にしろ！それが無理なら、元に戻せっ！」

「おや、女に戻りたいのか？」

「…源造が迷惑してるだろ」

源造をチラツと伺い、恵が言つた。源造はやせ我慢をしてくるのが、

そんなことない。そんなことないと、手を振つていた。

「お前は黙つてろ」

恵が源造を怒鳴りつける。

そして、小悪魔のほうを向いて

「さあ、元に戻してくれ」

と言つた。

「本当に戻りたい？」

「ああ。本當だヨ」

恵が言つた。

「…ごめん。実はどっちも叶えられないんだ。つまり一人はもう入れ替わる事は出来ないんだ。君たちの魂を入れ替えるのに相当な魔力を使つてしまつた。恵と美木の記憶を変えた時以上に…」

小悪魔が嫌みつたらしく言つた。恵の魔法が時期に切れる。

と、言つた時と同じ口調だ。

今朝の出来事もある時、同様、嘘ではなかつた。

小悪魔はちゃんと恵の望みを叶えた。こいつは本当に、嘘をつかない奴だ。

どっちも叶えられないというのもまた、嘘ではないだろう。

「わかつた。寿命だろ？だつたら俺からとれ」

源造からは取るなと言わんばかりに言ひ。

「め、めぐちやん？！」

源造が恵を止めようと、恵の前に出ようとすると、恵が伸ばした蘇我源造の大きな左手に邪魔された。「無理だね。100年とっても君たちを元に戻す事は出来ない」「つーーー？」

恵は驚いた。そして、前の事を思い出し、身構える。前はこの台詞の後に呪いをかけられたのだ。

「慌てる事はない。今回は呪いをかけるなんて真似はしない。」「どうやら、今回は大丈夫らしい。

「・・・本当に元に戻せないのか？」

恵が真剣に聞く。

「今のことには無理だ。」

「.....勝手なこといつてんじゃねえよ！俺はともかく、恵が困つてるじゃねえか。恵は俺の身体なんて嫌だつて言つてるんだよー。」「天使恵の姿をした蘇我源造が恵の後ろで叫んだ。

恵は源造のその言葉に、再び気まずくなつた。

そういうえばさつき、俺、源造に『お前の身体で男になつても嬉しくないのだ』と言つた氣がする。

「...源造...実は俺、さつき、また嘘言つちまつた。俺、実は嬉しかつたんだ。こんな凄い力の身体が手に入つて...。俺、6年間ずっと思つてたんだ。こんな身体が欲しつて...。」

恵が言つた。

源造は驚いているのだろう。あるいは、恵のバカラしさにあきれているのか...。

「...だったらこれでいいじゃねえか...」

「げ、源造？！俺じゃなくてだな。お前の気持ちが重要なんじゃねえか」

「めぐのためなら、女にでもなんでもなつてやる...。」

半分、自棄だった。

恵はそんな源造の気づいているから余計に源造を元に戻してあげたかった。

男が女になつて、嬉しい筈がない。それがたとえ、愛する女性の為でも…。

恵はそう考へていたから、なんとしても元に戻りたかったのだ。

だが、そんな恵の願いは小悪魔に無視された。

「交渉成立だな」

二人の様子を伺つていた小悪魔はそういうと、消えてしまつた。

「おい待て！」

恵が叫ぶ。そして、小悪魔が完全に消え、恵が冷静に戻ると、「ば、バカヤロー！お前、自分が何言つたかわかつてんのか！？」

恵が怒つた。蘇我源造の姿だから迫力がある。

源造が一步後ろに引いた。

「…」「めんよ。めぐちゃん。でも俺、決めたんだ。めぐちゃんのためなら何してもいいって…」

そうだ。こいつはそういう奴だ。アマゾンに行こうと、女子高に行こうと、アルプスを越えようといつてくる奴だ。現にこいつは大阪にまで来てしまつた。

「…源造、辛いぞ。覚悟できてるのか？」

恵が真剣な口調で源造に尋ねた。

「…わからねえ。でも、努力してやる。恵だつて出来たんだ。俺にも出来る」

源造の声も真剣だつた。

恐らく、本気で言つているのだらう。

「あれは9歳の話だ。それに俺はもともと、女だつたんだぞ？」「恵はゆつくりとした口調で源造に再確認した。

「でも男の子だつて思つてたんだろ？同じじやねえか。」

「しかしだな」

恵が呆れた感じで言った。

「…頑張るよ」

源造は小さな声で言った。

流石の源造もいつものような大声を出す、自身はなかつた。なかつたが、その言葉に偽りはなさそつだ。

「…本当にいいんだな？」

最終確認だつた。

「俺はめぐの為なら、頑張る！」

源造は今度はしつかりと宣言した。

「・・・・」

暫くの沈黙があつた。

恵は何か考えているようだ。

「わかった。もう、何も言わない。だが、問題が一杯ある

「問題？」

と、源造が首をかしげる。

「そうだ。もう一度、整理するぞ。お前が天使恵で俺が蘇我源造だ。これは変更できん。いいな？」

源造が頷いた。それを確認し、恵が言葉を続ける。

「つまりだ。お前が家に帰つて、天使恵として過ごさねばならん。反対に俺は源造ん家に行つて、蘇我源造として過ごさねばならん。」

「つまり、俺が恵になりきらなきやならねえつてわけだ」

もう大分、源造は落ち着いていた。もしかしたら、今日見た、あの映画、結構役に立つているかもしだれない。残念ながら源造は途中で眠つてしまつた為、あの映画が最終的にどうなつたのか知らないが…。

「この落ちつた感じだと恵は最後まで映画を見ていたようだ。

「バレんなよ。ばれたら最後だからなー！」

恵が言った。

『そうだ』と恵は自分の心の中で再確認した。

あの映画の中盤で、トムだったか、リサだったかが、『もう駄目

だ。皆にちゃんと話そう』と弱音を吐いたのだが、もう一人が『ばれたが最後、二人とも大学に連れて行かれ、

人体実験で解剖されてしまう』と言っていたのだ。

学者にとつて『入れ替わり』などというのは現実に起るはずがない、好奇心を抱いた学者に、モルモットにされるといつのである。美木がいたら『めぐちゃん、映画の見すぎよ』と言われたかもしれないが…生憎、ここに美木はいないし、源造は映画の中盤を見ていない上、ここまで力説する恵に逆らう事など出来ない。

「うん」

あまり理解できなかつたが、源造は頷いた。

「…とにかくだ。お前、俺の家は…知ってるよな？」
当たり前だ。どれだけ行つた事だらうか？

「ああ。ばつちり」

「…頬子さんには氣をつけろよ。何かと危ないから」

「頬子さんって、めぐんちのメイド？危ないってどーが？」
源造が目をぱちぱちさせて問いかける。
その様子が、また、可愛かつた。

恵は再び、心臓をドキドキさせせるものの、何とか今度も抑えるのに成功した。

「（全く、何なんだよ。男つて奴はよお…）」

力があるのは嬉しいが、この気持ちを抑えるのは本当に辛い。いつそのこと、このまま、押し倒してやうつか？と考えるが、それは絶対に男の中の男とはいえない。

これでは最低の男になつてしまつ。それに相手は自分だと、何度も言い聞かせた。

「ああ、色々とな…」

恵は説明できなかつた。

今の自分の気持ちを顔に出さなければいけないのに必死だったのだ。はつきり言つて恵はすぐに顔に出してしまつタイプである。

「後はおっさんだな」

「あのおっさんってめぐちゃんの……？」

そう、父親のことだ。

「何かと、危険人物なのはお前もしってるだろ？」

「確かにと源造は思った。

恵の家に最初に訪問した時、源造はその事を知らされる羽田となつた。

それに、性格の悪さも半端ではない。

あいつが、どこぞの王子が来たあのパーティーの時、源造にしたことといえば……。

「寝込みを襲うから気をつけろよ」

恵が忠告する。

「（ね、寝込みを襲うって？マジで？…）」と、源造が思った。俺だつてした事ねえのに……という言葉が喉元まで出てきたが、流石に飲み込んだ。

と、同時にこりや、ぐつすり眠れねえなと思つ源造だった。

天使恵の身体に傷でもつけたら、

あるいはあのおっさんに恵の写真でもとられてしまつたら、恵にあわす顔がない。

「頼子さんも結構危険だ。」

「寝込みを襲うとか？」

「そこまではせんが、やたらと奇妙な手を使つてくる。美木も氣をつけるよ。頼子さんと美木のチームワークは最高だ。」

「……なんか俺、不安になってきた……」

「まあ、お前は完全な男だから、大丈夫だろ？」

今は女なのだから完全かどうかはわからないが、まあ、大丈夫だろつ。

恵はそう思つていた。

「そうだよね。」

「」の気分転換の早さは源造らしい。恵がいう言葉は何でも信じてしまうのだ。

「それより、俺はどうすればいいんだ？お前のこと、あんまり詳しく述べる？」

「今日は、姉ちゃんいねえから、誰もいないし特に心配はないよ。俺は口数少ないので、

めぐちゃんは喋んなくとも大丈夫だよ。ご飯は適当にすませて…。

俺の家、貧乏だから悪いけど…部屋は片付けてあるから」

「そうか。わかった。大丈夫だ」

「…それと今日はバイトあるけど、休んでも大丈夫だから、心配しないで」

嘘だ。今度休んだら首にすると言っていた。

あの岳山との事件とかで結構、休んでたのだ。相変わらず工事現場のバイトだった。

だけど、恵にそんな重労働させるわけにはいかない。

「そうなのか？俺、どんな仕事でも大丈夫だぞ」

「大丈夫大丈夫。全然大丈夫」

だが、源造も顔に出るタイプだ。

天使恵の顔からは冷や汗がだらだら。すぐにわかる。

「やっぱり、大丈夫じゃねえだろ？どこだ、どこのバイトだ？大丈夫、上手くやるよ。」

「…丁目の…のバイト。でも、止めといった方がいいよ。重労働だよ？しんどいよ。」

「俺を誰だと思ってるんだ？大丈夫だよ。この身体も試したいし…」「で、でも…」

「大丈夫だつて！でつ、何時からだ？」

恵が自信満々に言う。多分、恵なら大丈夫だろう。

そう思つた源造は、

「8時から2時間だけ…。俺の顔は皆、知つてるみたいだし…その

点は問題ないと思う。名前は森田つて人だけしつとけば問題ないよ。現場責任者の名前だよ。現に俺もまだ2回しか言つた事ないし…」

2回で5回も休んだのだから問題大有りである。

「そうか…わかっただ。そろそろ行くか？」

夕焼けで空は真っ赤に染まっていた。大分、時間がたつてしまつたらしい。

「うんっ！」

源造が元気一杯、うなずいた。

2・これが事実なのだ（後書き）

ついにやつてしましました。源造・恵入れ替えネタ！
皆様の感想をお待ちしています！

3・源造を助けるのだ

河川敷から出て、一人は源造の家に向かうこととした。
源造の家はここからすぐ近い。

「いつもどおり、鍵はかけてない」
そういうて、源造が扉を開ける。

ここなら、大丈夫だと恵は思った。何度も来ているから大体の勝手はわかつてている。

「待った、ここはめぐの家なんだから入つて入つて…狭いけど」「お邪魔します」と言おうとした恵を源造が止めた。
恵もしまったと思い、口を手で押さえる。
不味い、これではこの先が思いやられるではないか。
これではいつボロを出すかわかつたものではない。
恵は不安だった。

「源造、俺も注意するから、ばれないよ」
恵は源造に忠告した。

「…わかってるよ」
天使恵の姿をした源造がいった。その口調、恵、そのものである。
「どうだ? 上手くいってるか?」
そうそう、この口調も恵のものだ。
と、いうより二人とも男言葉(?)を基本的に使っているのだ。
恵の一人称は”私”でも”アタシ”ではない。少し、努力すれば真似できるだろう。

それに恵は今、女の子になる為に、口調を変えようと努力している最中だ。

多少のことなら、皆を”まかせる”だろう。

「それじゃあ、俺は行くから」

源造が言った。恵がそんな源造を玄関から見送る。

天使恵の姿をした源造が玄関の扉を閉めると、家から元気よく出

て行つた。

「・・・全く、とんでもない事になつてしまつた・・・」

後に残された恵がぼそつと呟いた。

恵の手の中には魔本がある。いつも源造が持つてゐるからと、恵が預かる事にしたのだ。

天使恵の姿をした源造が持つていては、誰かが怪しむだろう。“入れ替わつた”とまでは流石に誰もわからないだろうが、恵が“小悪魔に男にしてもらおう”と思っていると誤解される事は間違いなしである。

恵は魔本を手に持つたまま、部屋へと向かつた。

源造の部屋、今の自分の部屋へと…。

一方、こちらは天使恵の姿をした源造源造である。
「とんでもない事になつちました」

源造は歩きながら呟いた。身体の動きは比較的いいが、この身体、明らかにパワーが足りない。恵がいつも悔しそうにしていた理由が嫌というほどわかつた。

「めぐちゃんも苦労したんだね」「
と、源造は溜め息混じりに呟いた。

もし、ここで誰かに襲われたら？ 考えただけでもぞつとする。自分は恵ほど、この身体を使いこなせそうにない。

源造がいつもしている体力任せの勝負では確実に負けるからだ…。この身体で勝つ為には恵の様に”素早さ”を利用し、勝負するしかない。

だが、その心配は杞憂だつた。源造と違つて恵の敵は少ない。いるとしたら岳山達だろうが、流石に前回の件で懲りただろう。ほかに下心を持つ男達もいるが、所詮、恵が女だと思って油断している奴らだ。

一瞬で決着をつけられ、体力まかせの源造の戦法でも勝てるだろ

う。

「恵さん！」

突然、背後から天使恵を呼ぶ声がした。

ドキッ！

源造は、自分の心臓がはつきりと音を出したのを聞いた。

嫌な予感がする。それに自分を呼び止めるあの声…よく聞く声だ。振り返つてみると、案の定、少し後ろで藤木が手を振っている。

「ふ、藤木！？」

源造が振り返つて驚いている間に藤木が走ってきた。

藤木は源造の近くへ来ると、

「どうしたんですか恵さん？こんな時間に…（一人の恵さんに会えるなんて幸せ）」

「…」

そうか、今、めぐなんだ。と改めて再確認、源造は頭の中で返答方法を考える。

「（こんな時、めぐはいつも…）いや、ちょっととな。藤木は？」

「俺？スーパーに買い物に」

といって、右手に持つているスーパーの袋を見せる。

魚や白菜が入っているところを見ると、今日の夜ご飯だろうか？

「恵さんは？」

「お、俺か？（めぐなら絶対こう問い合わせ返す）」

と、源造は聞いた。めぐの口調は大体わかっているつもりだ。だてにいつも恵をつけまわしてはいけない。

「またあ、俺なんて言つて。美木さんに怒鳴られますよ（会話して

る。恵さんとフツウに会話している。それも一人つきりで…）」

藤木は嬉し涙を流しそうになるのを堪えながら喋った。

まさに天国にいるかのような気分だ。

いや、本来の恵が聞いたらそれは普通どころか嫌味なのだが…幸い相手は源造だった。

「（いかんいかん、めぐちゃんの真似しきしまつた。）あつ、あ

はあはあは

とにかく笑つて」まかす。その間に源造は次の対処方法を考える。

ボロは出せない。これも恵の為だ。

「あ、実は、ちょっと散歩にナ

「さ、散歩、いいですね」

藤木も緊張して呂律が回つていない。

その為か、天使恵の姿をした源造も藤木と同じように必死な事に気づかないらしい。

「それより恵さん。源造に気をつけてくださいよ。源造の奴、恵さんが今、反論できないのを知つて卑劣な手を使つてますから。」

何だと！？と、叫びそうになつて源造は慌てて、自分を抑えた。

今、自分は蘇我源造ではなく天使恵なのだ。ここで殴つては駄目だ。

「（危ない危ない。もう少しでめぐとの約束破るとこりだつたぜ）あつ、でも、大丈夫だろ？」

と、そっけない返事だけを返す。

今回は何も考えずに地で答えたのだが、恵でも恐らへ、こう返すだろう。

「いやいや、アイツは元魔王と呼ばれたあくどい男ですよ。今だつて何考えてるかわかりませんよー！」

藤木が力説する。殴つてやろうか？と思つ源造だが、それは不味い。

とにかく、このままではボロが出ちまつ。

そう思つた源造はわざとらしく腕時計を見て

「あつ、もう行かなくちゃ」と、可愛らしく言つてみせ走り出す。いまさら、記す必要はないが、恵はとても綺麗だ。天使のような綺麗な身体の持ち主だ。

そんな身体を100点として、走る姿を70点とする。これで170点だ。

中身が”源造”という問題をマイナス50点として引いてもまだ

100点以上も点数が残る。それほど、天使恵は美しかった。

そんな天使恵が走つていくのを見て、藤木は追いかける事もなく…

「あつはい。」とだけ声を返す。

幸せそうな顔だった。追いかけるなんてとんでもない。走り去つていく恵の後ろ姿が見れるだけで十分満足だ。

「（恵さん、今日は一段と綺麗です）」

と、藤木は感じた。

皮肉な事だがもしかしたら源造の方が、恵より綺麗に身体を動かしていた。

恵本人がそれを知つたら相当なショックを受けるだろう。

俗に体育座りと呼ばれる座り方で蘇我源造の身体をした恵は膝を抱え、畳の上に座っている。ここは源造の部屋…そして、今は自分の部屋のようだ。

何故こんなことになつたのだろう。これが一時的かどうかすらわからない。もしかしたら、一生このままのかもしれない。望んでいた筈だ。

自分はこうなる事を…。いや、嬉しい事は嬉しい。この力が自分の中になつたのだ。だけど、素直に喜べない。自分は今、蘇我源造なのだ。望んでいた天使恵という男ではない。自分は蘇我源造で、源造が天使恵という女なのだ。望んでいたものとかなり違つた。自分は天使恵という男になる予定だつたのだ。こんな結果、望んでいなかつた。

「ゲンゾー、上手くやつてる力ナ？」

恵が天井を見上げて呟いた。心配そうな顔だつた。

「それにしても…男ってのは全く妙な生物だ」

恵が溜め息混じりに呟いた。

その妙な生物（^ 恵曰く）に自分は今、なつてゐるのである。

源造という男であるが、源造も長年の願いだつた男だと云ひ事は間違いない。

「男の中の男か…」

こうやつてなつてみると、男の中の男になつたのかどうかはわからぬ。

今まで自分はずつと女だつたのだ。そんな簡単になれるはずがない。

恐らく今はまだ、男の中の男からは程遠いだらう。

恵はふと机の上を見る。
机の上に置いてあるアナログ式のオーソドックスな田覚まし時計
は5時を差していた。

「8時か」

と、恵は咳く。

8時にバイトだ。

それまでどうしようかな？

恵はそう考へ、無意識に足元に落ちてゐる魔本に目を向けた。

「！？」

魔本を見て、恵は声も出せないくらい驚いていた。

小悪魔が魔本の上で胡坐をかいて座つてゐるではないか…？

「よお」

小悪魔が声をかけてくる。

恵が一步、後ろに引く。

「・・・お、お、お前、なんで？」

「あれえ～？ 意外？ いつもこうやつてるけど、源造言つてなかつた

？」

小悪魔が言つた。恵は首を横に振る。

そんな事、聞いてないヨ。

「まあ、気にしなくてもいい。私は何もせん」と、明るい口調で言われても、相手は小悪魔だ。

源造を女にしてしまつた奴だ。自然と気にかかつてしまつ。

「・・・本当にいつもこうやつてるのか？」

「やうだよ。源造の話し相手になつてあげてるんだヨ（寿命も取れるし）」

小悪魔が言つた。いつやつて小悪魔が話すと、別人のように思える。

「そつそつ、一つ忠告しつべ…」

と、小悪魔が言つた。

「何だヨ？」

恵がジト目で小悪魔を見る。

「源造の呪い消したわけじやないから。」

小悪魔が平然と言つた。

「あつ、今、恵になつてる源造の方…。」

小悪魔が補足する。この言葉は恵に衝動を与えた。
女にしてしまつただけでも罪悪感を感じているのだ。
その上、呪いときては恵は黙つていられなかつた。

「な、なんだとお…」

恵が拳を握り締めて小悪魔を睨みつける。

「あれえ、喜ぶべきじやないの？源造は今、非力。ピンチに陥つた
源造を男の恵が助ける。そうすれば源造に格好いいとこ見せられる
んだヨ」

小悪魔が感謝される覚えはあつても恨まれる覚えはないと言わん
ばかりに言つた。

「ふざけるな！」

「ふざけてないさ。それより源造を助けなくていいのカナ？」

小悪魔が意地悪そうに言つた。

次の瞬間、恵は小悪魔をその場に残し走り出していた。

天使恵の姿をした蘇我源造は走っていた。

家まであと少しという時だった。

「ハツ！？」

源造は自分の真上でその気配を感じた。

源造ははつと飛び跳ね、横に逃げる。今まで立っていた場所には大きな、鉄骨が落ちていた。直撃していたら即死だつたろう。小林の家の特訓、大分、効果が上がつているらしい。大きな大きな鉄骨だつた。

「（不味いな。呪いがまだ消えてねえ）」

ずっと呪いなんてなかつたが、今また復活した。

もしかしたら、前契約した契約の期限切れなのかもしれない。

「小悪魔のヤロー！」

源造は複雑な気分だつた。

もし小悪魔が源造という魂に対し呪いをかけたのでないとなれば再び、蘇我源造の身体をした恵が被害にあつといふことになつてしまつ。その点は良かつた。

だが、この身体に傷をつけたらどう詫びる？・どちらにしろ、恵も被害を被るのだ。

源造は複雑な気分だつた。

「だ、大丈夫ですか！」

上方で声が聞こえた。

源造が見ると、5階建てのビルの上に誰かい。鉄骨が落ちてきたビルである。

上にいるのはヘルメットを被つてゐる若い男だ。恐らく、工事現場の作業員だろう。

「すみません！急に落ちてしまつて！大丈夫ですか！すぐに降りますから！！」

工事現場の人々が上で叫んだ。蒼白な顔をしている所を見ると、こ

の人の責任になつてしまつたのだろうか？

「いえつ！大丈夫ですからもういいですっ！－」

と、源造が大声で返す。

恐らく、あの作業員に責任はない。

悪いのは小悪魔であり、呪いをかけられている自分だ。源造はそう叫ぶとすぐに、走り出した。

ここにいではあの作業員に迷惑をかけるだけである。まだ若い男だ。工事現場を首になるかも知れない。

工事現場にバイトをしている自分としてもこの男に迷惑はかけたくない。

源造は一田散に走り出した。家まであと少しだ。

走る。走る。

もうすぐだ。

この角を曲がると……。

…見えた。

この大きな豪邸。天使恵の家だ。

ようやく、天使恵の姿をした源造はついに天使邸に到着した。

玄関の前で、源造は立ち止まつた。

急な運動の為か、前かがみになり、膝に手を置き、少し深呼吸する。

そして、源造はインター ホンを押しそうになつて止める。

ここは自分の家だと言い聞かせる。

源造は再び、門を見た。

ちょっと待て……。

この家ではインター ホンを押さなければ家に入れないではないか。

そびえたつ門を見ながら源造は思つた。

結局、源造は天使恵の細く綺麗な右手で、インター ホンを押した。

『お帰りなさいませ恵様』

声がした。

「ただいま

とだけ声を出してみる。

扉がゆっくりと開いた。

源造は『くくりと唾を飲み込むと、ゆっくりと天使邸に入っていた。

『（源造、ばれるなよ）』

自分自身に言い聞かせる。ばれるわけにはいかない。

玄関に入つて、まず一番にみた人物、それは頬子さんだった。

「（めぐが頬子さんには気をつけろって言つてたけど、どういう意味なんだ？）」

検討もつかない。こんな優しそうな顔をした人が何かするとも思えない。

「お帰りなさいませ。恵様」

『いついうとき、恵はどう返事するんだ？』と考えていると

「恵様、女の子は『いつこいつ時、『愛する頬子さん、ただいま』といふのです」

頬子が言った。ナイスタイミングだ。

あやうく源造はその台詞を言いそうになつてしまい、慌てて口を押さえる。

そして、

「ふ、ふざけんな。何が愛する頬子さんだ」

源造が叫んだ。源造の口調だが、恵のものとほどど変わりがない。

・・・意味がわかつた。

恵が言つていた意味がわかつてしまつた。

どうして頬子さんに注意しなければならないのか…。

源造はこの人の意外な一面を見た氣分だつた。

「駄目ですよ。恵様、女の子は女の子らしく

かなり厳しい口調で頬子さんが言つた。

当然であるが源造だと言つことには気づいていないらしい。

駄目だ。

悪王と呼ばれた源造でもこの女には勝てない。

源造は戦意喪失し、玄関から廊下へとあがつた。

恵の部屋は何度も行つた事がある。その点は安心だつた。

「（めぐつていつもこんな事、言われるのか？）」

源造は歩きながら考える。何だが、恵の気持ち（苦労）がまたも少しあわかつた気がする。

後ろをチラツと伺うが、もう頬子さんはもついなかつた。

源造はドアを開ける。そう、この大きな部屋、恵の部屋だ。

「（ここだけでも、俺んちと同じぐらいの広さじゃねえか）」と以

前は思つたが、

もう、ここに来た回数も数え切れない。特別、違和感は感じなかつた。

「ハア…」

源造はソファーに座ると溜め息をつく。堂々としているのは源造の性格だらう。

やつと一人になれた。

源造はまだ、完全に整理できていない自分の頭をもう一度、整理しようとする。

「（まず、めぐが俺になつて俺がめぐになつちまたんだよな）」「信じられない。やっぱり信じられない。そんなことが現実にあつていいのだろうか？」

だが、今の自分を見ても信じるしかない。胸が自己主張している。自分はスカートを履いている。さらに、身体は柔らかく、身体は男ではない。

鏡の前で自分の身体を見る。そこには天使恵が立つていた。どこからどうみても天使恵の身体だった。

「ハア…」

源造はもう一度溜め息をつく。

よく見ると前にいる恵も溜め息をついているではないか？鏡なのだから当然だ。

「（めぐは溜め息なんかつっちゃ駄目だ。可愛くない用）」

と、源造は前が鏡といつ事も忘れ、心の中で滋いてしまつ。

「（待て待て、前は鏡じやねえか…。可愛いナ）」

だが、不思議なことに源造は鏡に抱きつきたまではならなかつた。

普段なら相手が鏡だらつと間違いなく、抱きつこてしまつていただろひ。

鏡に映る恵、それだけでも十分だつた筈だ。
だが…抱きつけない。抱きつこうといつ氣が起こらない。
何もかも望みどおりになつてしまつからかもしれない。
鏡の中の恵は思いどおり動く、笑つてみせれば笑う。
自分が怒つてみせれば怒る。

「（めぐちゃんは前にいるのに…。）」

駄目だ。どう頑張つても前にいるめぐを好きになれない。

”綺麗だな”とは思つ。

だが、それ以上はどう頑張つても思えない。

いや、相手は鏡に映つた自分なのだ。自分自身が天使恵なのだ。
この感情が普通なのだろう。

感情はある程度は容器（身体）で変わつてしまつものなのだろう。
源造は理由もわからないまま、深い溜め息をついた。

その時、
「…………」
とベルが鳴る。電話の呼び出し音だ。

源造は恐る恐る受話器を取つた。

『恵様、お電話です』

電話の向こうで頬子さんが言つ。

電話？誰からだらひ。

『美木様からです』

美木ちゃんか…。ややこしい氣がする…。

源造は不安になりながらも、

『わかった』と一言、言つた。

『つなぎます』

軽くプツと電話を切り替える音が聞こえる。

『もしもし。恵?』

美木の声だ。

「み、美木ちゃん? な、何かしら?」

『…別にそこまで女の子らしく必要ないわよ。いつものように美木で良いわよ。』

でも意外だなあ。電話したそしそう恵が女の子らしいんだもの『美木は電話の向こうで軽く笑いながら言つた。どこか嬉しそうだ。源造はしまつたと思つ。そうだ。』

恵は美木のこと呼び捨てにしているのだ。

「い、いやちょっと。でつ、なに、力ナ?」

源造はぎこちない喋り方で言つた。

「いや、これからちょっと出てこられる?」

「これから?」

源造が聞き返す。

「うん、ちょっと恵に伝えたい事があるから」

「伝えたい事?」

「悪いけど私の家まで来てくれない? 向かいにいかせるから」

「…・わかった!」

「うなつては断るわけにはいかない。」

源造は少し戸惑いながらも答えていた。

「じゃあ、表に出ておいてね。」

美木はそう言つてすぐに「切るよ」と言つて電話を切つたようだ、プーフーと通話が途切れたことをあらわす電子音が聞こえていた。

慣れない身体で全速力で走っている為か、呼吸がかなり乱れる。それでも速度を落とす事無く、恵は走っていた。自分の家・天使邸まで後、少しだ。

もつとも今は自分の家がどうかはわからない。上手く喋らないと、門前払いをくらってしまうだろう。自分の父親の性格ぐらい把握している。

恵は走りながら今後のプランを考えていた。
その時、一台の黒い車が自分を追い抜いていった。
見覚えがあつた。

「あれは、美木の家の車！？」
何でこんな所を！？と考えるが答えはすぐに出る。
なに簡単な事だ。この近くでの車が行く場所といふのなら天使恵の家しかない。

そう、源造が何かのトラブルに巻き込まれて、美木の家に行くと
いつことしか…。
美木が何で自分を呼ぶかわからない。だけど、あれは源造を迎える
に行くものだ。
と、恵は確信していた。

「くそッ。先回りダ」

恵は方向を変え、美木の家へ向かう。

「（無事でいろよ。ゲンゾー！）」

恵は走った。ひたすら走った。

美木の家までならこのペースで走れば10分もあればつく。

「（ペースを落とすな。走れ！）」

今にも心臓が飛び出しそうなぐらいの負担がかかっている。
呼吸もかなり乱れてきた。

「（くつ。いくらゲンゾーの身体とはいえたん）」

だが、恵はペースを少し落としただけでそれ以上落としきはしがなかつた。

「（こうしている間にも源造に何があるかもしれん）」

恵は身体に鞭をつち、走り続けた。

頬子さんに、美木の家に行きたいとだけ、ぶつきらぼうに告げた。明るい笑顔で頬子さんは玄関まで連れていいってくれた。普段の恵とどこか様子が違うと薄々、感ずいてはいるようだが、中身がパイナ君（＜源造のこと）だとは夢にも思つてもいないだろ？

玄関の外には黒いボディーの車が一台止まっていた。

源造も何回か見たことがある。美木の家の車だ。

源造が近づくと運転手がドアを丁寧に開けた。

「どうぞ」と、手招きをしている。

入学したてのころなら戸惑つてしまつたかもしだれないが、あの二人と付き合つてもう大分たつている。恵の家の車にだつて美木の家の車にだつて乗つたことがある。

それにこの運転手だつて初対面じゃない。こうこうのにも慣れていた。

源造は無言のまま乗り込んだ。いつもの恵はどうやって乗つていたのだろうか？

脳裏にそんな事が浮かんだが、運転手が無表情のまま運転席に座つたという事を考へると、特別、失敗はしなかつたらしい。

「（と、とにかく車に乗つたけどよお。俺、これからどうすればいいんだ）」

なんとか美木の家の車には無事、乗れた。

が、一番の問題は美木だ。隠し通せるとは思えない。

「（男は諦めてはいかんのだ）」

自分自身に言い聞かせた。とはいへ、自信は全くない。演技力は下手だ。それは自覚しているつもりだ。

それに美木と恵が普段、どんな会話をしているのかも検討がつか

ない。

これでは戦時中、言葉も通じない敵の陣地の真ん中に一人でのりこむようなものだ。

「（美木ちゃんにだけは話すか？）」

源造は考えた。

その時、恵の『ばれるなよ』という声が頭の中で響いた。源造はブルブルと頭を左右に振る。

「（何考えてんだ、俺。めぐと約束したじゃねえか。）」

源造は自分に言い聞かせた。

そんなことを考えている間にも車はまた一つ交差点を通過し、美木の家へと近づいている。

「（そういえば、美木ちゃんの大変な用つて何だ？）」

思いつかない。

普段、恵と美木はこんなふうに何度もあつてているのだろうか？
それとも今日が特別なのだろうか？
わからない。

そんなことを考えているうちに車は門の前に止まった。

恵の家とはまた違う、純和風の豪邸だ。規模も恵の家の数倍はありそうだ。

「（ついちまつた）」

源造が呆然と座っていると、運転手がドアを開けてくれた。
新鮮な外気が流れ込み、源造は急に現実に引き戻される。

「恵様、どうぞ」

源造はゆっくりと立ち上がった。

そして屋敷を見て、ゴクリ。と、唾を飲み込む。

「（もう逃げられねえ。めぐの為にも俺は行く！）」

決心した。

一步、一步と足を進める。敵の城に乗り込むかのような足取りだ。

「よござ。おいでくださいました、恵様」

聞きなれた声…坂月さんだつた。

源造は顔をあげ、彼を見る。そして、

「美木ちや、…いや美木が用つて何か？」

「詳しくは私も存じていません。美木様より直接お伺い下さい」

坂月さんは丁寧な口調で言つた。

彼も、当然の事ながら天使恵が源造だと気づいていないようだ。

「美木様…恵様をお連れしました」

坂月は襖を開けると、言つた。

部屋の中に美木がいるのだろう。

「恵、入つて…」

源造の予感は的中した。

部屋の中から聞こえたのは美木の声だつた。

源造はゆっくりと部屋に入った。

襖が閉められた。

前に美木が座つていた。美木は今日、会つた時と全く同じ格好をしていた。着替えてないのだろう。美木はじつと源造を見ている。

「あ、あのぉ。な、何かな？」

源造が聞いた。

「あつ、ごめんね。こんな時間に呼んで」

外はすでに暗くなり始めている。

「いや、別に…」

源造は言つた。

「実はね。あの小悪魔のことだけど（恵、何かへん？）」

美木は違和感を感じながら言つた。

「…小悪魔がどうかしたのか？」

源造は聞き返した。特別、恵の真似をしたわけではないが、幸いにも恵が喋つてているのとあまり変わりはない。

「今日ね。あの後、私、恵をこつそり追いかけようとしたの…。このことについては謝る。私が勝手にとつた行動だから…。でも、その途中、急に意識がなくなつたの。」

「意識がなくなつた？大丈夫かよ？（めぐみちゃんを追いかけようとした？）」

心配そうに源造が聞いた。その雰囲気がまさしく恵と同じ感じだ。身体がある程度、同じ雰囲気に見せていいのだろうか？

「うん。大丈夫。でも…（やつぱりいつもの恵力ナ？）」

「でも…？」

「頭の中で誰かが必死に恵を追つなつていてた。誰だかわからぬ。わからないけど、なんとなくあの時に似てた。大和撫子杯のあるときに…。もし前が小悪魔の仕業つて言うのなら、今回も…。」

美木は恵の顔を伺いながら話した。

「（美木ちゃんはめぐを追いかけようとした。だけど、途中で意識を失つちまつた。それは小悪魔のせいだった。・・・待てよ。理由がわかつちまうじやねえか…。何で小悪魔が美木ちゃんをめぐや俺と合流させなかつたか…。）」

そうだ。理由はタダ一つ。

小悪魔は恵と源造を入れ替わらすのに邪魔な人間を呼びたくないなつたのだ。

それしかない。

あまりに簡単にわかつてしまつた原因をどう美木に説明するか源造は戸惑つ。

説明する＝正体を白状するなのだ。自然と、美木から田線を逸らす。

「そ、そんなこと…」

「流石にないとは言えない。

「（どうする？ばらしちまうか？だけど、めぐみちゃんが…。）」

自分の中で問いかける。

「恵はどう思うの？小悪魔のせいだつて思つわよね

美木は同意を求めるかのようにいった。

「……」

源造は戸惑つていた。どう答えてよいのかわからない。

「恵？」

不審に思った美木が尋ねる。」

美木は恵のテンションが低いことに疑問を感じていた。

「（やつぱりいつもの恵じやない）

「（ま、不味い。どう答えりやいいんだ？）」

返答に戸惑う。源造の小さな脳みそ（→失礼だなっ！）では致し方あるまい。

なんて答えればいいのか全く分からなかつた。

「どうしたのよ？恵らしくないわよ」

美木がもつともな事を言つた。

確かに中身は源造。恵らしくないのは当然のことだ。

「や、そんな事ないよ。美木ちゃん」

言つてしまつてから慌てて口を押さえるが、時すでに遅しである。

「み・き・ちやん？ 恵？」

美木は首をかしげている。

「どうしたのよ？いつもの恵らしくないわよ。喋り方に戸惑つてるのはわかるけど、今は普通でいいのよ」

「…い、いや、やういうわけじゃあ（ま、不味い。ば、ばれちまつよ）」

源造が戸惑いつつも答える。

「美木ちゃんなんて、それにその喋り方まるでゲンゾー君みたいね」

美木が冗談のつもりで軽い口調で言つた。

だが、美木は見た。見つしまつた。

その言葉を聞いた自分の前に座つていてる天使恵が顔色を真つ青にしたのを・・・。

「め、恵？（…やつぱりいつもの恵じやない…）」

「…あ、あの、あのわあ…（な、情けねえぞ。これぐりこでパーク
るなんて…）」

源造は何かを言つ返そつとするものの、声が震えてまともに喋れない。

パニックを起しきれないようこと自分自身に言い聞かせるも、いい案が浮かない。

相手は仮にも美木なのだ。そう簡単には誤魔化せそうにない。

その時だった。襖が開いた。

「お取り込み中、申し訳ございません。ですが急を要しますので…」坂月さんだ。急を要すとは言つてもいつものように落ち着いた口調だ。

「あの方をお見えです。お通ししますか?」

「あの方?」

美木と天使恵の姿をした源造が、同時に聞き返した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0799a/>

ゲンゾウにナレマシタ

2010年10月10日13時45分発行